

日本学生海外移住連盟（学移連）「設立趣意書」（1955）とその変遷にみる
「人間の正しい移動」についての考察

設立趣意の変遷：

学移連設立趣意の文章の最初は；

「日本の海外への発展と、その維持とは単に国内問題として取り扱われるべきではなく、国際的視野のもとに世界人類、特に次の時代を担う学生の連繋協力によって解決しなければならない。それは民族の国際的交流、移動が世界各国に対し、直接、間接に多くの影響を及ぼし、又、世界各国の人口支持力ならびに生活程度の消長が、その国の政治経済を動かして、国際関係に多大の影響を及ぼすからである。

従って、今後における海外発展の正しい解決は各国民、特に学生間に於ける相互の諒睦、そして、これに伴う知的交流文化の配分等につき、協力一致するとき、初めて見出される。新しい日本建設に当たり、我々は斯くの如き視野に立ちつつ、海外問題の研究と、その解決に努力し、且つ、国際友愛精神による国際的寄与への第一歩を強く踏み出さんと欲するものであります。

自然には国境がなく、人類の間に本来、何らの確執もあるべき筈はない。否全人類総てが相携え、その生活の向上と文化の建立とに努力すべき責務を有するものであります。

然るに、海外移住に関する研究とその推進とに関し、次の世代を背負う若き学生間に於いて、従来、その全国的提携、協力が極めて欠ける点の多かったことに鑑み、茲に、各大学有志の賛成を得て、世界平和を祈念しつつ、日本学生海外移住連盟を設立せんとするものであります。」

と述べられている。

その後、組織の拡大と活動内容も多岐にわたるに及び、「追加説明」として「海外移住を国内問題にとどめず、国際的観点から考察する問題意識の在り方には変わりはないが、単に移住そのものの内的考察から外的考察にも同等の比重を置き、海外移住そのものを一義的に考察するグループと、その対象国を一義的に考察するグループを設ける」などの考え方を説明している。

さらに学移連は、国内での講演活動、海外調査団の派遣、日本フロンティアセンターの設置、夏季合宿などが実施され、昭和40年（1965）には、学移連創立10周年記念音楽会、昭和44年（1969）には、第一回学位連OB会も開催された。

規約第三条の改正：

上記のごとく、学移連の輝かしい活動の中で、昭和45年（1970）5月17日、第51回全国総会（於；東京農業大学）に於いて、規約第三条が「学移連の目的は海外移住から、“人間の正しい移動のあり方”」と改正され、移住の拡大解釈が表明された。

諸先輩方の長年のご努力により、学移連は今年、2015年に創立60周年を迎え、グローバルな世界情勢の変化の中で、我々OB同志の知識向上を図ることはもとより、後輩諸君に精神的知見を伝播する必要性を痛感しております。

そこで、この60周年記念学移連OB会・年次総会に於きまして、学移連創設の趣意の変遷の文言の中で述べられております、やさしくて、かつ、深みのある文言としての、「人間の正しい移動」という文言に注目して、私なりに取り上げて考察してみたいと思います。

すなわち、「人間の正しい移動」は世界観、歴史観に当てはめて、現在でも、非常に重要な重い意味を持つ文言であると新ためて考えております。

私は、学移連OBとして、また、今日まで学生時代、企業勤務、海外駐在、大学非常勤講師を経て、ラテンアメリカ地域を研究して来ました一人として、この文言の深度を検証してみたいと思います。

まず、最初に、“人間の正しくない移動”とは（？）：

何故、このことから始めなければならないのか。それは歴史観、世界観のなかで、近現代社会において、人間が考えなければならない多種、多様な事例が存在し、今日でも継続しているからです。これを具体的に示すならば、征服、侵攻、奴隷、戦争捕虜、拉致、不法移民、自然災害、原発事故、など等が列記されます。

すなわち、基本的には、自分自身の意思ではなく、何らかの外的事情により、無理に移動させられた、などの場合がこれに当たると考えられる。このような「自分の意志によらず」ではなく、フロンティア志向をもって、海を越え、国境を越える、「正しい方向」へ導く、教育、施策が重要であり、求められるのではないか。

「文化の概念」と人間の置かれた環境：

文化の概念とは、その社会で、支配的な価値、イデオロギー、信仰、知識、言語、芸術、文学などの代表的な言葉が浮かぶ。これをラテンアメリカ地域の人間の置かれた環境に当てはめてみると、表“文化の概念”のごとくまとめられる。

ここで言う、“人間の置かれた環境”とは、この地域で言えば、先住民、征服者、奴隷、移民が代表的な位置づけとなるのではないか。これらの環境は各々、大きな制約、制限を受けて、圧迫に反抗し、自由を求める傾向がコロンブスの到達後500年を経て、ラテンアメリカ文化を生み、その後、数多くの革命などによって、“インディヘニスマ”（先住民主義）へと進展した。インディヘニスマは進歩主義的な運動で、インディヘナではなく、メスティーソにより唱えられた。この運動は、未来を先コロンブ期の過去の再来とみるものではなく、ヨーロッパと決別した未来、つまり、イベリア両国の征服によって、ラテンアメリカ地域に押し付けられた文明とは異なる新しい文明が開化するような未来を築くためのよりどころを先コロンブス期の過去に求めると言う考えである。

注) インディヘニスマ (Indigenismo) ; 先住民主義 :

進歩主義的な運動として、1910年のメキシコ革命後に見られる、三大巨匠（ディエゴ・リベラ、ホセ・クレメンテ・オロスコ、ダビド・アルファロ・シケイロス）の自由な壁画運動は、その代表

文化の概念

その社会で支配的な：

価値	先住民 死に対する価値観	征服者 黄金 香料	奴隷 生きること	移民 新天地の夢
イデオロギー (その人又は集団の歴史的、社会的立場に基づいて作られた根本的な考え)	宇宙観	スペイン文化 ポルトガル文化	捨てた	定住地の環境で変化
信仰	ジャガー神 猫神 太陽神	キリスト教布教	隠れて存続	本国のものが残りつつ代替わりで現地化
知識	天文学 耕作	航海術	現地化	本国の継承
言語	ナワトル ケチュア アイマラ トゥッピー	スペイン語 ポルトガル語	現地化 (支配者の言葉)	一世は本国
芸術	石碑、音楽 石彫、舞踊 壁画	教会芸術 (アラブ・イベリア文化)	解放後復活 (木彫、金工 音楽、踊り)	本国のをまねる。そのうち混合
文学 (詩、小説、戯曲)	“ポボル・ヴフ”	文学	解放後	新天地での新しい作品
征服から500年のうち 300年は植民地時代		スペイン ポルトガル	アフリカ人	(中国、イタリア、日本、ユダヤ、ドイツ、ユーゴ)

〈ラテンアメリカ文化〉

「圧迫に反抗し、自由を求める傾向」

「インディヘニズモ」 ←…………… 〈メスチーソ文化〉

「民族の移動と文化融合の接点」として生まれた混合文化：

ラテンアメリカ地域の混合文化の形成は、図、「ラテンアメリカの混合文化」に見られるように、三方向から到来して、この地域の先住民の文化と融合したものである。しかしながら、この三方向からの到来は、必ずしも「人間の正しい移動」であったとは限らず、それは、むしろ、「正しくない移動」であったといえるのではないか。

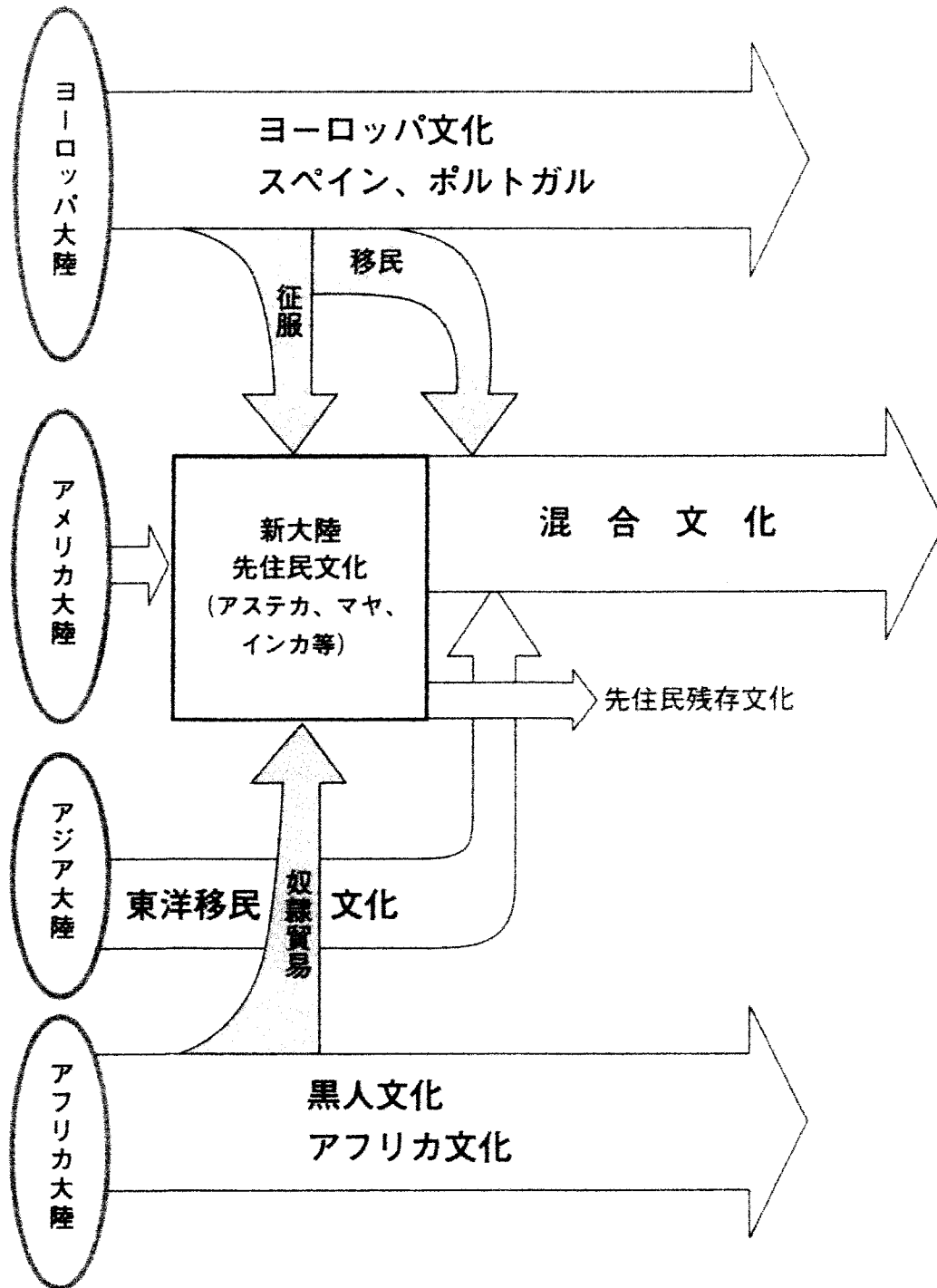
ヨーロッパから、今日のラテンアメリカ地域（新大陸）への移動は、コロンブスの事情、起業家としてのアイデアとスペイン王室とのJV事業という形態であったとの見方もある。その後は、アングロサクソンのパイオニア精神による進出という形態の北アメリカに対して、「征服」という、コンキスタドル精神による進出が続き、これはイベリア半島のスペインとポルトガルを中心とする男性中心の侵攻となって、それは人種、宗教、言語までの征服へと展開されて、やがて本国の政策と相まって、この地域の300年間におよぶ植民地支配となった。

その長い間に民族と文化の融合が進んで、混合文化が形成されることとなった。また、植民地政策はモノカルチャー経済の展開の中で奴隷貿易という形態が盛んに行われ、アメリカ大陸からの黒人移送、東洋人の移送が行われた。さらに世界は、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして、イデオロギーの違いからのソ連邦、アメリカ合衆国の対立による「東西冷戦期」を生み、ラテンアメリカ地域においても、「東西代理紛争」が様々な国、地域で起された。これらは貧富の格差、ハイパーインフレ、債務危機問題などを生み、先進工業国と発展途上国という南北問題に発展した。また、植民地政策の後は、移民という移動や、就労民という移動形態も散見された。

注) パイオニア (Pioneer) 精神：北アメリカ植民者の西部への開拓精神。

コンキスタドル (Conquistador) 精神：ヨーロッパのイベリア半島を中心とする新大陸への征服者精神。

ラテン・アメリカの混合文化



アメリカ大陸の移民の流れ：

何故、ヨーロッパから新大陸への人間の移動は起こったのか、については、先の征服劇で検証したように、1492年1月2日に、グラナダ陥落により八世紀に及ぶイベリア半島のイスラム支配からのレコンキスタしたことによって、大量の兵士の失業“が発生し、この事が、コロンブスの”西回り航海計画”の売り込みと実行に結びついたとされる。

その後は、征服と植民政策として、スペインの「スペイン化・キリスト教化政策」、ポルトガルの「実利的、民族的、宗教的偏狭さの少ない社会形成」という方針にもとずいて、Encomienda 制と、Capitania 制による植民地に拠点が確立されると、新天地への殖民、すなわち、一般人の移動が積極的にはかれ、発展した。また、植民地の経済を担うプランテーションはブラジルを中心とする砂糖プランテーションと北アメリカを中心とする綿花プランテーションの発展によりアフリカ大陸からの黒人移入という手段での労働力補填としての奴隷貿易へと展開された。

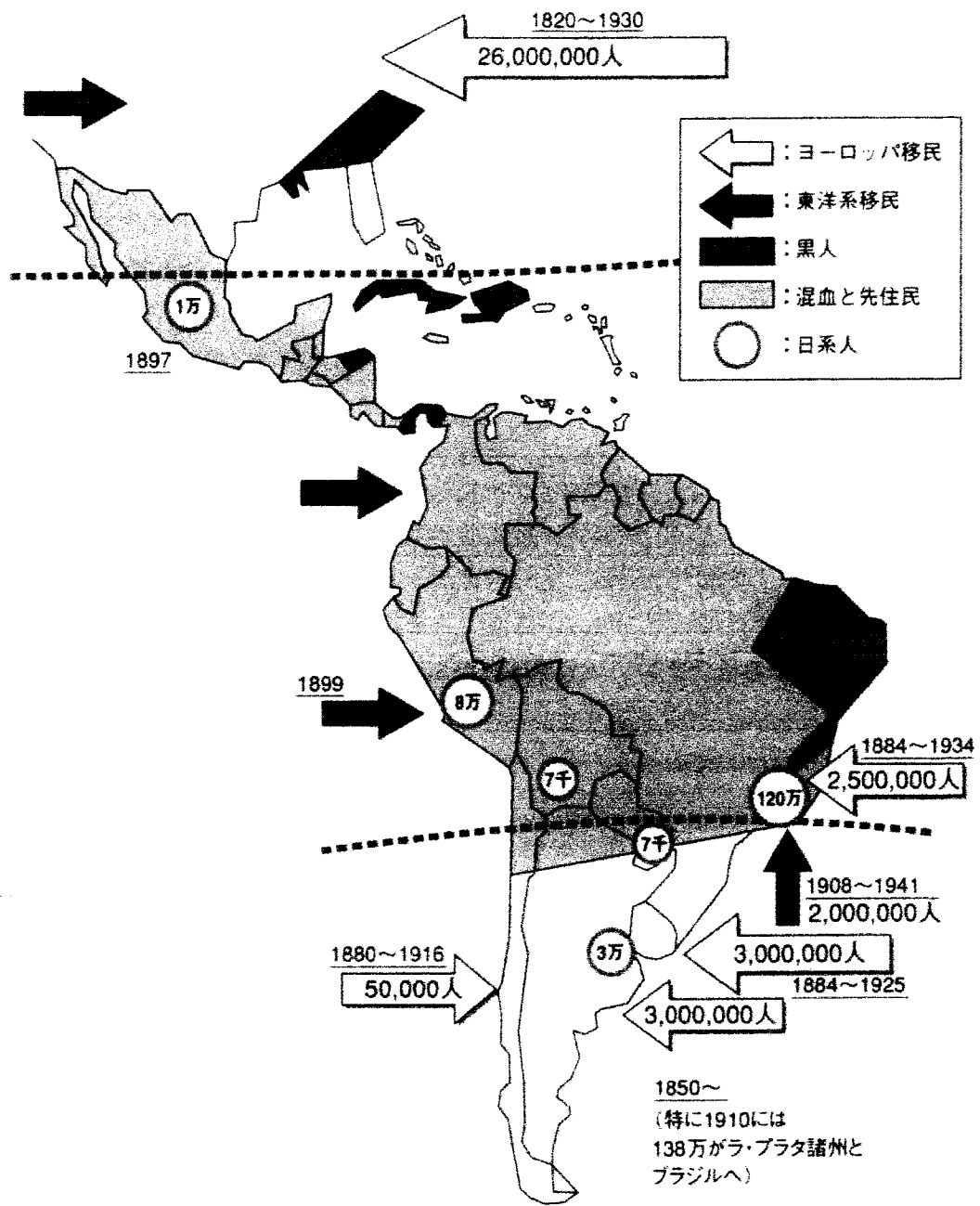
この展開による人間の移動は、図、“米州の移民の流れ”に示す大きな流れとなって表われた。ヨーロッパ移民の増大は、大西洋の航海条件の変化としての汽船の出現による植民地生産品の流通増加とも関係している。また、日本、東洋からの移民も現地の農業開発を目的として、その依存度は増した。但し、日本人・日系人の間では、経済発展の変化や差により、1980年代に入るとラテンアメリカ地域から日本への就労移動という現象も起こった。

注) レコンキスタ (Reconquista) : イベリア半島のアラブ・イスラム教徒からのキリスト教徒による再征服。

Encomienda 制 : スペインの植民地政策で、王権による行政確立前の政策で、植民者に委託して、一定の権利を与える方策。

Capitania 制 : ポルトガルの植民地政策で、カピタン (長官) の権限のある土地の意味で、長官は小作人を使って、実際に開拓する資力のある者に必要面積の土地を無償で与える。

米州の移民の流れ



(参考) ラテン・アメリカ史、白水社

人を核とする相互理解の原点：

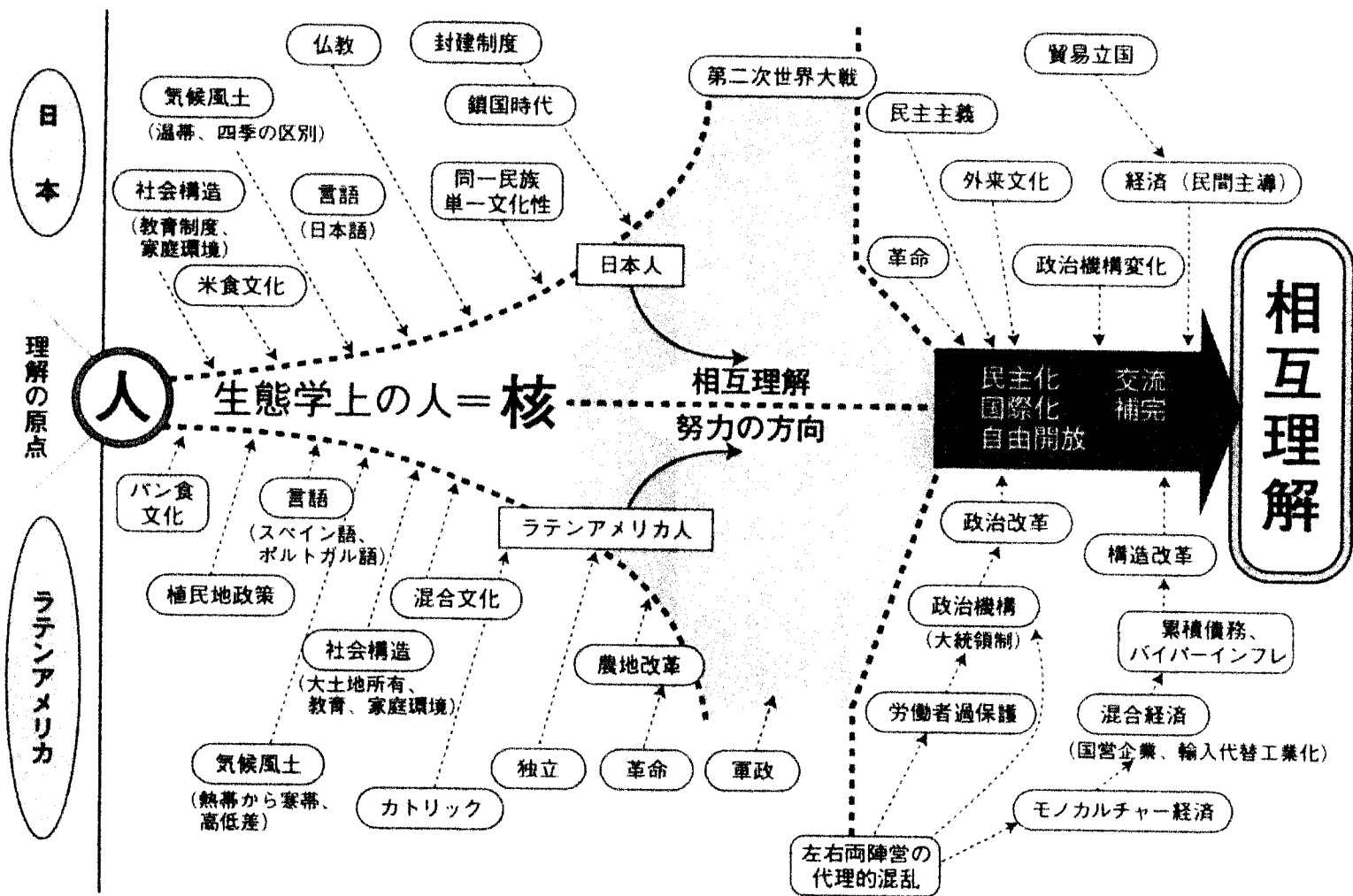
人と人は、何故、対立するのか。世界の中で、宗教、イデオロギイ、国境、等等、あらゆる地域紛争は消えることが無い。“人間の正しい移動”のなかで、何故、相互理解は成されないのか。

このことを、生態学上の人の核として考えてみたのが、図、“日本・ラテンアメリカ「人核」論概要”である。私は、“人は生まれた時は、みな同じ”という考えを持ち、それを核とすると、その後は成長してゆく過程における環境によって、その土地、地域の事情、動向を吸収して思想などが培われて行くのではないかと思っている。そこで、相互理解の原点をこのように求めることにより、“人々の間”の理解が可能になるのではないか、と思われる。図は、日本とラテンアメリカについて考察したものであるが、各々の生誕から変遷する環境を政治、経済を含め、第二次世界大戦という大きな事柄を考慮しながら、追跡してみると、日本人は島と言う自然環境、米食、日本語、仏教のなかで育ち、成長してきた。一方、ラテンアメリカ地域の人々は、パン食、スペイン語、ポルトガル語を主とする言語、そして、主にカトリック教、混合文化のなかで育ち、成長してきた。

また、日本人は、建国 2600 年という長い年月の中で、限られた、狭い環境のなかで、独自の文化を創造し、第二次世界大戦の敗戦を経験して、その大きな節目をとうして、経済大国になったが、現在のグローバリゼーションのなかで、如何に生きるか、という問題に突き当たっている。そして、ラテンアメリカの人々は、混合文化の中で、国家の独立形成、革命、軍事政権などを経験した、比較的身近な 200 年という生活環境の中で、今日までの成長を成してきた。これらの環境変化の過程で、両者の交流が行われ、歴史上のイベントが記録されてきたが、今日、益々グローバル化する両者間では、“人”を核とした交流の重要性が増すと共に、そのことを基本とする”相互理解”が双方の政治、経済、文化の発展に欠かせないことである。

要は、“正しい人間の移動”を通じて、お互いの原点と、その変遷を学び、理解しあうことが、“相互理解”に結びつくものと確信する。

日本・ラテンアメリカ“人核”論概要



国際関係の分析と企業活動視点：

” 地域 “を考えるに当たり、地球上の人の誕生の瞬間を” 人の核 “とすると、その後の” 人の形成 “は育つ環境、すなわち、人と社会を形成した、“家庭” と” 地域 “によって培われる、ということ述べてきた。

昨今の世界情勢の中で、「日本と過去に戦ったことの無い地域」としてのラテンアメリカ地域との関係を“21世紀のパートナー”と位置づけ、その地域の人と社会の形成を広角的、かつ、複眼的に検証することは意義深いことである。

ラテンアメリカ地域を研究し、企業活動を行うに当たっては、過去を知らずして未来を予測できない、という視点から、“アメリカ大陸文明とヨーロッパ文化の出会い”と”今日のグローバルな世界の中でのラテンアメリカ地域の混合文化の姿 “を国際関係の分析のなかで、**Global Level**, **Regional Level**,そして、**Local Level** 位置づけを認識しつつ、ビジネスマンの企業活動を見る必要がある。

” 国際関係論 “では、**Global Level** と **Regional Level** の視点から分析し、論ずる必要がある、一方で” 地域研究 “を論ずる時は、**Regional Level** と **Local Level** の視点から見る必要がある。このことから、「企業活動視点」からは、両方の視点が必要であるが、ビジネス経験、特に、拠点オペレーション、プロジェクト・オペレーションの視点では、**Local Level** における民族対立、人種暴動、宗教対立、地域紛争を分析することは勿論、民族、人種、種族、宗教、歴史、社会、文化、伝統などの事項をビジネスマンとして勉強することが求められる。

国際関係の分析と企業活動視点

